

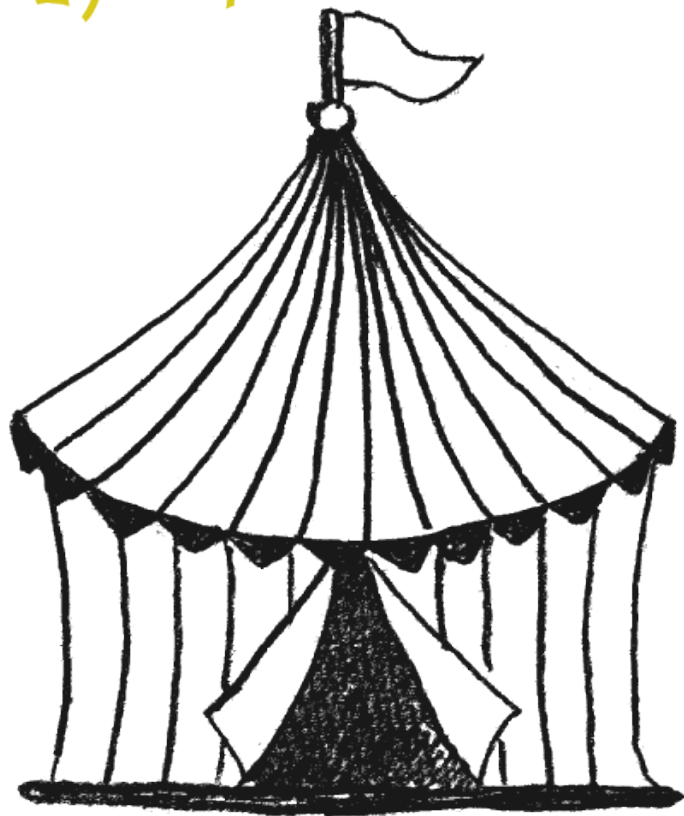
Greatest Children Japan

チャリティ公演朗読ミュージカル

『旅一座ジェリー・ドルフィンとしかめっ面王国』

作・演出・音楽 HARUTAサーカス

旅一座ジェリー・ドルフィンとしかめっ面王国



登場人物

ジェリー・ドルフィン・・・旅芸人一座の座長
フォックス：一座の花形 正体は赤ギツネ
キャット：一座のヒロイン 正体は山ネコ
バード：一座のダンサー 正体は蒼サギ
ドリル：一座の賄い婦 正体はマンドリル
ボア：一座の脚本家 正体はアナコンダ
ギル：一座の道化師 正体は桜マス
マーガレット：一座の大女優 正体は花
プリンセス：一座のアイドル 正体は姫ネズミ
ウィンディ：一座の見習い俳優 正体は風
アビー：笑う事が大好きな少女
ホビー：笑う事が好きじゃないアビーの兄
ネリー：心配性なアビーたちの伯母
コールド女王：コールド王国の女王陛下
スマイル王子：本当は笑いたいコールド王国の王子
シリアス大臣：王国を裏で操る男 正体は闇
ロンドン：一座の興行を邪魔する村人
スコットランド：ロンドンの弟分
アイリッシュ：ネリーの弟 一座を応援する村人
ウィーン：アイリッシュの恋人 大の音楽好き
子供時代のジェリー
ジェリーのパパ
ジェリーのママ
ゴブリン
ギャンブル場の男たち
兵隊
観客

プロローグ

貧しい家。酔っぱらったジェリーの父親。
怯える子供のジェリー。

ジェリー「パパ、もうやめてよ。飲みすぎだよ」

パパ「うるさい！ガキのくせに生意気な口たたくんじゃない！あっちへい
つてろ！（ジェリーを突き飛ばす）」

ジェリー「ごめんなさい！パパ、叩かないで！」

パパ「メアリー！メアリー、いないのか！？」

ママ「どうしたの！？まあ、あなたまたそんなに…」

パパ「酒を持ってこい！」

ママ「ないわ」

パパ「ない？嘘を言うな！」

ママ「嘘なんか言うものですか。もう家にはひとかけらのパンも」

パパ「うるさい！（ママを叩く）」

ママ「あ！（倒れる）」

ジェリー「やめろ！ママを叩くな！（パパにしがみつく）」

パパ「離せ！こいつ…離せ！（ジェリーを突き飛ばす）…」

出て行くパパ。

泣きながら台所に戻るママ。

膝を抱えて泣くジェリー。

そこに笛を吹きながらゴブリンが現れる。

ゴブリン「また泣いているのか？」

ジェリー「うるさい、あっちへ行け」

ゴブリン「泣いたって何も変わらないぞ」

ジェリー「じゃあどうしたらいいのさ!？」

ゴ布林「さあな。だがお前にひとつ、いいものをあげよう」

ジェリー「いいもの?」

ゴ布林「ああ（笛をくれる）」

ジェリー「なにこれ?」

ゴ布林「この笛を吹くと、どんな奴とも友達になれる」

ジェリー「本当?」

ゴ布林「ああ本当だ」

ジェリー「僕、友達いないんだ。友達が出来たら何をしたらいいの?」

ゴ布林「簡単なことさ。笑えばいいんだ」

ジェリー「笑う?」

ゴ布林「さあ、吹いてみな」

ジェリー「うん」

笛を吹き始めるジェリー。

第一幕

とある町での芝居公演のエンディング。

M 「旅一座ジェリー・ドルフィンテーマ」(短)

ジェリー「いかがでしたか?お楽しみいただけましたでしょうか?」

客「ジェリー・ドルフィン最高!」

ジェリー「はーははは、ありがとうございます!お客様の笑顔が私たちに
とって何にも変えがたい宝物。またいつかお目にかかれるその日まで、皆
さまごきげんよう!死にたくなったら!？」

客・劇団員「笑いましょ!」

ジェリー「サンキュー、メルシー、ダンケシエーン!ありがと、謝謝、グ
ラーシアス!ふあははは、ひーひひひ…」

笑いながら終演するジェリー・ドルフィン一座。

終演後。

ジェリー「さてさてそれでは、次なる町へ出発しましょうか。バード、次はどこだったかな？」

バード「トランプ村です」

ジェリー「トランプ村か…」

キャット「どうしたの？気が進まない顔して」

ジェリー「うーん」

フォックス「そうか、キャットは知らないんだな」

キャット「なに？私が来る前の話？」

フォックス「ケツケケケ」

ジェリー「(咳払い)」

ドリル「すっちゃまったんだよ」

マーガレット「一座のお金全部。ポーカーに負けてすってんでん」

座員「(大笑い)」

ジェリー「ふん！」

ボア「トランプ村はギャンブルで成り立ってる村でね、バカラにルーレット、スロットマシーンにブラックジャック、ありとあらゆるゲームが揃ったカジノヴィレッジなんだ」

キャット「へー、楽しそう」

ギル「ダメダメ！お前なんかカモにされるだけさ」

キャット「そんなの分かんないじゃない」

ドリル「とにかく今回はギャンブル禁止！」

座員「えー！！」

ドリル「飯が食えなくなってもいいのかい！？」

座員「……」

ドリル「特にジェリー」

ジェリー「ん？」

ドリル「分かってんだろぅね？」

ジェリー「あたりまえだよ、ドリル。いくら僕だって同じ過ちは犯さない」

疑いの目でジェリーを見る座員。

M 「ポーカーフェイス」

結局、すってんてんになるジェリー。

フォックス「どうするんだよ、ジェリー！」

ドリル「まったくあきれてものが言えないよ！」

バード「だからあれほど言ったのに」

マーガレット「才能が無いのよ」

ボア「運もない」

キャット「やつと分かった、みんなが止めた理由」

ギル「どうするんですか？この先の旅」

座員「だけど、どうして、ポーカーなんだ！？」

ジェリー「…かつこいいからかな」

フォックス「ポーカーフェイスなんて一番の苦手だろう？」

ギル「いいカード来て笑っちゃってるんだもんなあ」

ジェリー「ははは…顔に出てたかい？」

座員「バレバレだよ」

ジェリー「すまない…」

キャット「まあ、やつちやったことはもうしようがないじゃない」

ジェリー「キャット♡」

ボア「けどどうする？川を渡る橋の渡賃だってもうない」

マーガレット「野宿はごめんよ」

キャット「私は構わないわよ」

マーガレット「さすがは山ネコ」

キャット「あんただって元々は花でしょ？野宿も野宿、屋根なんて不要じゃない」

マーガレット「そっちこそ屋根は寝床じゃないのよ」

マーガレット・キャット「ふん！」

バード「仕方ない。やりますか？」

フォックス「そうだな。グズグズ言っても解決しない」

キャット「そうね、なんてったって私たちにはこれがあるものね」

ギル「いっちゃやったりしますか？」

ドリル「ほらジェリー、しっかりおし」

ジェリー「ああ…」

ボア「頼みましたよ、座長」

ジェリー「うん」

マーガレット「上手くいったら今夜は…うふっ♡」

ジェリー「ひょー！よし、それじゃ路上で一発稼いで、豪華なディナーと参りましょうか！？レッツミュージック！」

M 「ぼくらはみんな生きて死ぬ！」

ギル「しかし良かったですね。なんとか旅の資金が集まって」

フォックス「ほんとに一時はどうなるかと思ったよ」

ジェリー「笑う門には福袋、人生何とかなるものよ（笑）」

バード「良く言うなあ、有り金すって青ざめてたのに」

ジェリー「何か言ったか？バード」

バード「いいえ、別に」

キヤット「あら、この匂い…」

ボア「どうした？キヤット」

キヤット「なんだか体中の血が騒ぐような…ニャー！」

暴れ出すキヤット。

みんなで取り押さえようとするが捕まらない。

いつのまにか紛れ込んでいる姫ネズミのプリンセス。

ドリル「こりやだめだね。このままじゃ魔法が解けちまう」

ボア「ジェリー、急いで笛を」

ジェリー「了解」

笛を吹き始めるジェリー。

徐々に落ち着いてくるキヤット。

フォックス「大丈夫か？キヤット」

キヤット「ふー、なんとかね…どうしちやったんだろう、あたし」

ボア「あぶなく猫に戻ってしまうところだった」

マーガレット「それより、あんた誰？」

プリンセス「ばれた」

逃げて隠れるプリンセス。

ジェリー「おーい、出ておいで。心配しないで大丈夫。僕たちは旅一座ジェリー・ドルフィンだ。君だったんだね。キヤットはきつと君の匂いと気配に気付いて動転してしまったようだ。おそらく君は、ネズミじゃないかな？」

プリンセス「あたり」

ジェリー「いつから着いて来てたんだい？」

プリンセス「トランプ村」

ジェリー「ほう。あの村のネズミちゃん」

プリンセス「うん。私は姫ネズミのプリンセス」

ジェリー「どうして着いてきたんだい？」

プリンセス「お芝居がしたいの」

ドリル「芝居？あんたがかい？」

プリンセス「そうよ。私はシンデレラをやりたいの。それが私の夢」

バード「だから着いてきたの？」

プリンセス「ええ」

フォックス「けどどうかな：俺たちは喜劇役者だ。人を笑わせるのが仕事だろう？シンデレラみたいなおとぎ話はやったことがないしなあ」

ジェリー「まあいいじゃないか。夢を持つのは自由だろう？それにどんな悲劇も喜劇にするのが僕たち」

座員「ジェリー・ドルフィン一座！」

ジェリー「キャット、どうだい？この子を一座に加えてもかまわないか？」

キャット「ええ。私だって路地裏で死にかけてたのを拾ってもらったんですもの。どんな仲間も歓迎するわ」

マーガレット「とか言って、食べられちゃわないように気をつけなさいね」

プリンセス「OK」

一同「（大笑）」

ジェリー「そうと決まれば旅を続けよう」

第二幕

風の強い峠道。

フォックス「なんて強い風なんだ」

ボア「みんな大丈夫か！？」

マーガレット「ぜんぜん大丈夫じゃないわよ」

ジェリー「ギル、バード、ドリルは無事か!？」

バード「なんとか!」

ドリル「ちよつと待っておくれ、私はこの先は行けそうもないよ。おいて
いっておくれ」

ギル「そんなこと出来るわけないでしょう!？ジェリー・ドルフィン一座
は仲間を見捨てたりしない!」

ジェリー「ギルの言う通りだ。よし、ここで少し風が止むのを待とう」

キャット「こっちに來てプリンセス」

プリンセス「ありがとうキャット」

ボア「しかしこの風はなんだろう…」

ジェリー「どうかしたか？ボア」

ボア「ほらあっちを見て」

ジェリー「ん？大きな椎の木だな。それがどうかしたか？」

ボア「揺れてない」

ジェリー「んんん？…本当だ」

ボア「どうも俺たちだけに向かって風が吹いているようだ」

フオックス「そんなことってある？」

ボア「わからない。だが現にこうして」

ジェリー「むむむ…よし」

笛を吹き始めるジェリー。

すると次第に風が止み、風のウインデイが姿を現す。

ジェリー「正体は君か」

ウインデイ「引き返せ。この峠は通さない」

ジェリー「どうしてだい？」

ウインデイ「どうしてもだ」

ジェリー「どうしてもでもなんだ？」

ウィンディ「どうしてもどうして言っても、どうしてもだ」

ジェリー「どうしてもどうして言っても、どうしてもだからってどうしてだ？」

ウィンディ「うー…どうしてもだ！」

ジェリー「じゃあ仕方がない。引き返そう」

フォックス「え、本当に？」

ジェリー「ああ。どうしてもどうして言っても、どうしてもだって言うんだからどうしようもないだろう」

ギル「別の道を探しましょうかね」

ジェリー「そうだな」

バード「意地の悪い奴だな」

キャット「きつと誰も友達がいらないわね」

プリンセス「べー」

マーガレット「あつたまきちやう」

ボア「ドリル、手を」

ドリル「ありがとう、ボア」

ボア「いいさ、仲間じゃないか」

ウィンディ「…ちよつと待て」

ジェリー「どうしたんだ？」

ウィンディ「…通してやってもいいぞ」

ジェリー「おや、急にどうしたんだい？」

ウィンディ「…ただし」

ジェリー「ただし、なんだい？」

ウィンディ「…友達になれ」

フォックス「友達？ふざけるなよ。お前のおかげで俺たちは、今来た道を引き返さなきゃならないぞ？」

ジェリー「まあ待て待て。友達が欲しいのかい？」

ウィンディ「…嫌ならいい」

ジェリー「嫌とは言っていない。だが、友達っていうのは条件を出し合っ

たりするもんじゃない」

ウインディ「じゃあどうすればいいんだよ。僕はずっとここで一人つきりなんだ。どうやって友達になるかなんて知らないよ！」

ジェリー「笑えばいいんだよ」

ウインディ「…笑う？」

ジェリー「そう。練習してみよう、さ」

ウインディ「え…」

ジェリー「まずは口を横に開いて」

ウインディ「…こうか？」

ジェリー「それでいい。その後、目を大きく開いて」

ウインディ「やった」

ジェリー「いいぞ。最後に」

ウインディ「最後に？」

ジェリー「心の中で言ってごらん。一緒にあーそぼ」

ウインディ「…一緒にあーそぼ」

M 「Play With Me」

ジェリー「どうだい？ともだちって最高だろう？」

ウインディ「うん！ありがとう、ジェリー」

ジェリー「君、名前は？」

ウインディ「ウインディ、風のウインディ」

ジェリー「そうか、それじゃあウインディ、旅を続けよう」

ウインディ「うん！」

旅を再開する一座。

しかめっ面王国の入り口。

立て看板に【これより笑うべからず　しかめっ面王国】

二人の男が現れる。

フォックス「これより笑うべからず、しかめっ面王国。なんだこりゃ？」

マーガレット「ずいぶん偉そうな看板ね」

ボア「笑うなって言われても…困ったね」

プリンセス「別に気にしなきゃいいじゃない？」

ギル「そうですね」

ドリル「笑っちゃいけないだなんて、1分だってもたないよ」

一同「(大笑)」

ロンドン「こら、お前たち！何を笑っている！？」

スコットランド「この看板が見えないのか！？」

ロンドン「いいか、ここからはコールド女王率いるしかめっ面王国だ！何人たりとも笑う事は許されない！」

スコットランド「従わない者は死刑だ！」

一同「(大笑)」

ロンドン「やめろ！笑うな…！笑うなど言ってるのが聞えないのか！？」

スコットランド「やめないと撃つぞ！（ライフルを構える）」

ジェリー「(ホールドアップ) 落ち着いてください。しかし面白い冗談を考えたものですね。笑ってはいけないだなんて、そんな馬鹿な事」

ロンドン「冗談？何を言っている、冗談なんかじゃない！」

フォックス「冗談じゃないって？じゃあ笑ったことないの？今まで一度も？」

スコットランド「…ある」

バード「あるんじゃない！」

スコットランド「昔だ…！女王が即位される前の話だ」

ジェリー「んー…弱りましたね」

ロンドン「何がだ？」

ジェリー「はじめまして、旅一座ジェリー・ドルフィンと申します。どうぞよろしく（ニツと笑って目を見開く）」

ロンドン「旅芸人か？」

ジェリー「まあ、そのようなものです」

スコットランド「それがどうした？」

ジェリー「僕たちは喜劇をやります。皆さんに笑ってもらってなんぼの商売、笑っちゃいけないとなると…商売あがったりです」

ロンドン「だったらほかへ行け、ほかへ」

ボア「そうは言っても、ここから先しばらくは人が住んでる場所はない」
ギル「花や鳥に芝居を見せても、お足はいただけませんからね。いっしし」

スコットランド「笑うなといってるだろう！」

ギル「ひ！」

ジェリー「じゃあこうしましょう。笑っていただかなくて結構です。ですが芝居はさせてください。それならば問題はありませんか？」

スコットランド「…どうする？」

ロンドン「…よし、わかった。決して笑わすなよ。笑わせたら」

ジェリー「承知しました。それでは皆の衆、参りましょう。いざ、しかめっ面王国へ！」

キヤット「大丈夫？あんな約束して」

ジェリー「入ってしまえばこっちのもの。笑わないわけがないだろう？ジェリー・ドルフィン一座だぞ、僕たちは。ふふ」

しかめっ面王国に入っていく一座。

第三幕

歌いながらテント小屋を建てていく一座。

しかめっ面王国での初演「裸の王様」。

※「裸の王様」の垂れ幕

フォックス(町人役)「王様が来たぞ!」

バード(町人役)「王様だ!王様だ!」

キヤット(町人役)「でも変ね、王様は裸よ」

マーガレット(町人役)「駄目よ、本当の事を言ったりしては。聞こえたら首をちよん切られるわよ」

ギル(詐欺師の仕立屋役)「こらお前たち!今、王様の悪口を言ったな!?!」
町人たち「言ってません!言ってません!」

ギル(詐欺師の仕立屋役)「どうだ?新しい王様の服は」

キヤット(町人役)「…素晴らしいと思います」

フォックス(町人役)「とてもカッコいいです!なあ?」

バード(町人役)「本当本当!俺も欲しいなあ」

良く見えるように近づく町人たち。

ギル(詐欺師の仕立屋役)「そうだろうそうだろう。だがこの服は貧しい者や馬鹿な者には見ることの出来ない布で出来ている特別な服だ。王様にしか似合わない、世界に一つしかないものなのだ!下がれ下がれ!服が汚れるだろう!」

ジェリー(王様役)「はーつくしよん!ぶるるる…」

バード(町人役)「くしゃみした!」

キヤット(町人役)「きつと寒いのよ!」

マーガレット(町人役)「なにせ裸だから(みんなに口を押さえられる)んぐんぐ…」

客の反応を伺う一座。笑わない観客。

ギル（詐欺師の仕立屋役）「…それでは王様、そろそろ城へ戻りましょう」
ジェリー（王様役）「ああ、そうしよう…早いところ風呂入りたい…ガタガタ…はーつくしよん！（帰っていく）」

町人たち「（大笑）」

パラパラの拍手。

終演後。

ジェリー「どうして誰も笑わないんだ？」

キヤット「さあ。とびきり恥ずかしがり屋が集まってるんじゃないかしら？」

ジェリー「笑う事の何が恥ずかしいって言うんだ？」

ギル「裸の王様は、爆笑間違いなしの演目なんですけどねえ」

フオックス「お前の詐欺師役がいまいちだったんじゃないか？」

ギル「ちよつとちよつと、私のせいだと言うんですか！？」

プリンセス「私は面白かったわよ」

ギル「ありがとう、プリンセス」

マーガレット「いつも通りだったと思うけど」

ウィンディ「もしかしたら」

ジェリー「もしかしたら？」

ウィンディ「虫歯がひどいんじゃないかな」

ジェリー「虫歯！？お客全員がチョコレート中毒とも言えるのか？」

ボア「それとも」

ジェリー「それとも？」

ボア「何か秘密があるのかもしれないな」

バード「秘密って？」

ボア「さあ」

ジェリー「…よし、調べてみよう！どうしてみんな笑わないのかを」

興奮した様子の女の子が飛び込んでくる。

キラキラした目で一座を見渡す。

フォックス「お嬢ちゃん、どっから来たの？」

ギル「今日はもう終わりですよ」

マーガレット「何か用？」

追いかけて来るドリル。

ドリル「待ちなさい！こら…ハアハア…」

キャット「どうしたの？ドリル」

ドリル「止めたんだけど勝手に入っちゃってさ…あんた、ここは関係者以外立ち入り禁止だよ。さ、出た出た」

ジェリー「まあドリル、いいじゃないか。こんにちは、お嬢さん。どうかしたのかい？」

アビー「とっても面白かった！」

驚いて顔を見合わせる一座。

ジョリー「それはどうもありがとう」

アビー「あんなに楽しかったのはじめて。どうしてもそれが言いたくて」

ジェリー「それは嬉しい。だけど誰も笑ってなかったようだけど、何か理由があるのかな？」

アビー「それは…」

少年が来る。

ホビー「アビー！アビー！アビー、ここにいたのか。ごめんなさい、妹が勝手に。さ、帰るぞ（アビーの手を引く）」

アビー「ちょっと待って。せっかく話をしてるのに」

ホビー「いいから帰るんだ」

アビー「でも…」

ジョリー「お兄さん」

ホビー「…はい」

ジェリー「もう少しゆっくりしていったらいいじゃないか。そうだ、ドリル、二人にお茶を。この間手に入れたクランベリーのクッキーも一緒に」

ホビー「いいえ、僕たちは…」

ジェリー「子供が遠慮するもんじゃない。遠慮するのはまずい料理と、財布が空っぽの時のデートの誘いだけさ」

座員「（大笑）」

シリアス大臣を連れて入ってくるロンドンとスコットランド。

ロンドン「シリアス大臣、こいつらですよ」

フォックス「なんだいきなり。お前、さっきの」

シリアス「失礼するよ」

ホビー「行こう、アビー（慌てた様子で出て行く）」

アビー「……（手を引かれ出て行く）」

シリアス「私は大臣のシリアスというものだ。君たちかね？芝居を見せて旅をしている一行というのは？」

ジョリー「はい、いかにも。ご挨拶に伺わず失礼いたしました。ジェリー・ドルフィン一座のジェリー・ドルフィンと申します。もし芝居をする上で許可が必要なのであれば、すみやかに手続きを」

シリアス「芝居をするのは構わない」

ジェリー「…左様ですか」

シリアス「ただし、笑う事、笑わせる事は固く禁じる」

ジェリー「笑いが禁止：それはいったいどういった理由で」

シリアス「国の決まりだ。それ以上でも以下でもない。守れないのならば芝居を中止して即刻、この国から出て行くがいい。話は以上だ。行こう（出て行こうとする）」

キャット「あの！」

シリアス「なんだ？」

キャット「ほんのちよつともダメ？」

シリアス「ダメだ（出て行く）」

ロンドン「ふふん（出て行く）」

困った様子の一座。

ボア「どうする？ジェリー」

ジェリー「うーむ…」

アビーの家。

怒りながら帰ってくるアビー。

追いかけて来るホビー。

ホビー「アビー待てよ。何怒ってるんだ？」

アビー「ホビーがつまらない人だからよ。こんな人が兄さんだなんて本当に頭来ちゃう」

ホビー「僕のどこがつまらないだなんて言うんだ！？」

アビー「全部よ、全部！あのお芝居を見てワクワクしなかった？思いつきり笑いたいってそう思わなかった？」

ホビー「そんなこと言ったって、決まりは決まりだ」

アビー「そんな決まり無くすべきよ！」

伯母のネリーがやってくる。

ネリー「あらあらまた喧嘩？今度はどんな理由？」

アビー「聞いてよ、ネリー伯母さん」

そこにネリーの弟・アイリツシュと恋人のウィーンがやってくる。

アイリツシュ「姉さん、姉さん、大変だよ！」

ネリー「どうしたの、アイリツシュ？血相変えて」

ウィーン「ネリー、それがね、町に旅一座が来たのよ！」

アビー「二人も見てたの！？」

アイリツシュ「ああ。それがね姉さん、ものすごい面白いんだ！」

ウィーン「お芝居も歌も素敵なんだけど、なんといつてもとにかく笑えるの！」

ネリー「あなたたち、まさか！？」

ウィーン「笑ってはいないわ」

アイリツシュ「大丈夫だよ。誰も笑いはしなかった…」

ネリー「ホビー、あなたがついていながらどうしてアビーをそんな所に」

ホビー「僕は止めたんだけど…」

ネリー「ねえアビー、この国では笑う事が禁止されているのよ。法を破った者の中には死刑になった人もいるわ。私は死んだ姉さんからあなたたち二人の事を任された。もしあなたたちに何かあったら、顔向けができない。だからどうか言う事を聞いて、二度と芝居小屋には近づかないで。いい？わかった？」

アビー「…嫌よ！私はまたもう一度、あのお芝居が観たい！ジェリー・ドルフィン一座の舞台を！」

しかめっ面王国の城。

しかめっ面をしているコールド女王。

コールド「それでその旅一座は、わが国民を笑わせてはいなかったのですね？」

シリアス「はい。笑い声は聞こえませんでした」

コールド「いいでしょう。わがしかめっ面王国に笑いはありません。そうですね、スマイル王子？」

スマイル「はい」

コールド「笑いは人間を墮落させます。笑いにいいところなどひとつもありません。笑って楽しいことばかり考えるようになれば、働く意欲はそれが、その結果税収が落ち、国の財政はひっ迫し、国力はガタ落ち、遂には隣国に攻め入れられ国土を失う事になるのです」

ロンドン・スコットランド「おっしゃる通りです！」

コールド「そうならないためには、心を引き締め、ひたすら真面目に、しかめっ面で暮らすことです！」

M 「しかめっ面王国」

アビーの家。

出ていこうとするアビーの手を引っ張るホビー。

アビー「もう、離して！」

ホビー「こんな時間にどこへ行くんだ？」

アビー「決まってるじゃない。お芝居よ」

ホビー「ジェリー・ドルフィン一座かい？」

アビー「そうよ、いけない？」

ホビー「駄目だ」

アビー「どうして？」

ホビー「駄目ったら駄目だ」

アビー「臆病者！」

ホビー「なんだって？」

アビー「怖いんでしょ？女王に見つかるのが」

ホビー「…そうさ。怖いよ、怖いに決まってるだろう」

アビー「ふん、私は怖くない！（飛び出していく）」

ホビー「あっ…アビー」

ネリーが来る。

ネリー「ホビー？」

ホビー「ネリー伯母さん…」

ネリー「アビーは？…ホビー、言いなさい、アビーはどこ？」

ホビー「それが…」

ネリー「まさか…（追いかける）」

ホビー「伯母さん！（追う）」

ジェリー・ドルフィン一座の芝居小屋。

客席の案内をするボアとドリルとプリンセス。

最前列に座るアビー。アイリッシュとウィーンも来ている。

ドリル「いらっしやいまし。ボア、今夜の演目は何だい？」

ボア「新作だよ。寝ずに書き上げた」

プリンセス「すごい！どんなの？」

ボア「プッチーニのオペラ『誰も寝てはならぬ』のパロディ、『誰も笑ってならぬ』」

ドリル「大丈夫なのかい？ピッタリすぎやしないかい？この国に」

ボア「だからいいだよ。創作意欲を刺激されてね」

ドリル「さすがだね。今晚は一杯つけるよ」

ボア「やった、そう来なくちゃ」

プリンセス「私も早くお芝居したいわ」

ドリル「文句言わないの。まだ入ったばかりなんだから」

プリンセス「だって」

ボア「ほらお客さんだよ」

アビーを探しに来たネリーとホビー。

プリンセス「あ、いらつしやいませ！ジェリー・ドルフィン一座へようこそ。お席へご案内します、こちらへどうぞ」

ホビー「いた、伯母さん、あそこだよ」

ネリー「アビー！」

プリンセス「(ネリーに吹っ飛ばされる) チュー！」

ネリー「アビー、帰りましょう」

アイリツシュ「うるさいな、もう始まる」

ネリー「アイリツシュ！」

アイリツシュ「姉さん！？」

ネリー「あなたたちまで、まったく…」

ウィーン「とりあえず静かに」

ネリー「もう…」

しかたなく座るネリー。

ジェリー「皆さん、今晚は！ジェリー・ドルフィン一座へようこそ。今宵は満席のようで少々窮屈かもしれませんが、どうぞ譲り合って素晴らしい夜にいたしましょう。お嬢ちゃん、また来てくれたんですね」

アビー「もちろんよ(立ち上がり振りむき会釈をする)」

拍手をする座員と観客。

ジェリー「私たちジェリー・ドルフィン一座は世界中の国を旅してきました。東洋の神秘的な国から、砂漠の中に突如現れるオアシスの国、大草原とダンスの盛んな南国に、雪と氷の北国、金と欲望の油田国から最高だった料理自慢の小さな島国！どの国も素晴らしい思い出がたくさんあります。そしていつまでも耳に残るのは観客の笑い声…」

観客「……」

ジェリー「聞きましたよ。この国は笑ってはいけないそうですね？」

アビー「そうなの！（立ちあがる）」

ネリー「アビー！（引っ張って座らせる）」

ジェリー「どの国にも事情はあるものです。仕方ありません。ですが、今夜ここに集まった皆さんはきっと笑いたいんでしょう？」

うなずく観客席。

ジェリー「ならば笑ってください！」

アイリツシュ「だけどそんなことしたら」

ジェリー「大丈夫」

ウィーン「なにか考えがあるの？」

ジェリー「（につこりうなずき）小屋の外に見張りを立たせますので、風が吹いたら泣いてください」

アビー「風？」

ジェリー「はい。ウインディ」

ウインディ「フー！（風を起こす）」

観客「わあ！（風にあおられる）」

ジェリー「はい、泣いて！」

アイリツシュ「え？こうかな…ふえーん、えーん…」

みんなも真似て泣き始める。

ネリー「……」

アイリツシュ「ほら、姉さんも」

ネリー「え！私も？……う……うえーん……」

ジェリー「はいはい、いいですよ、その調子！はい、皆さんも（本当の観客にもやらせる）」

ホビー「こんなんで大丈夫？」

ジェリー「心配ご無用。笑いと涙は紙一重なもの。それに、心が鈍感そうなの役人たちには、泣き声も笑い声も聞き分けられやしないでしょう。あはははは」

全員「（そうだそうだと大笑い）」

ジェリー「おつといけない！ウインディ！」

ウインディ「フー！（風を起こす）」

ジェリー「はい、泣いて！（本当の観客にもやらせる）」

全員泣き出す。

ジェリー「ふふふ……いいね！」

M 「S m i l e & T e a r s」

ピアノ & アカペラ

拍手喝采と笑い声。

アビー「ね？伯母さん。楽しいでしょ？」

ネリー「そうね。たしかに」

アビー「ホビーは？」

ホビー「うん…楽しいよ」

アビー「うふふ、良かった」

ウィンディ「いけない！奴らが来た！フー！（風を起こす）」

ジェリー「泣いて！」

みんなが泣いているところに、シリアス大臣が来る。

シリアス「（キョロキョロ見渡し）どうして泣いている？」

ジェリー「これはこれはシリアス大臣、見回りご苦労様です」

ロンドン「さっきまで笑い声がしてた気がするんだが」

スコットランド「まさかウソ泣きじゃないだろうな？」

アイリッシュ「この涙が見えないのか？」

ウィーン「悲しいストーリーにみんなこうして泣いているのよ」

ロンドン「どんな話だ？」

アビー「えっと…大酒のみの父親が騒ぎ出して」

ホビー「母親と少年に暴力をふるうんだ」

ジェリー「え？…」

アイリッシュ「悲しくなった少年は家を出る決心をする」

ウィーン「だけど少年は、食べる物も無く力尽きて死んでしまった」

《ジェリーの無意識の幻影》

ジェリー「パパ、もうやめてよ。飲みすぎだよ」

パパ「うるさい！ガキのくせに生意気な口たたくんじゃない！あっちへいってろ！（ジェリーを突き飛ばす）」

ジェリー「ごめんなさい！パパ、叩かないで！」

パパ「メアリー！メアリー、いないのか！？」

ママ「どうしたの！？まあ、あなたまたそんなに…」

パパ「酒を持ってこい！」

ママ「ないわ」

パパ「ない？嘘を言うな！」

ママ「嘘なんか言うものですか。もう家にはひとかけらのパンも」

パパ「うるさい！（ママを叩く）」

ママ「あ！（倒れる）」

ジェリー「やめろ！ママを叩くな！（パパにしがみつく）」

パパ「離せ！こいつ…離せ！（ジェリーを突き飛ばす）…」

出て行くパパ。

泣きながら台所に戻るママ。

膝を抱えて泣くジェリー。

ママも出て行く。

ママ「ごめんね、ジェリー（出て行く）」

徐々に力尽き、死んでいくジェリー。

そこに笛を吹きながらゴブリンが現れる。

ゴブリン「死んだのか？かわいそうに。だがな、世の中もつとかわいそう
な人がいっぱいいるぞ。どうだ？生き返りたくはないか？俺がこの笛を吹
けばお前は生き返り、新しい人生を歩き始めることが出来る。そうしてお
前は世界中のかわいそうな人たちと友達になって、みんなを笑わせるんだ。
どうだ？やってみるか？」

ジェリー「……」

ゴブリン「いいだろう。さあ、よみがえれ。そして始めろ、新たな人生を！」

笛を吹くゴブリン。

徐々に目覚め生き返るジェリー。

ジェリー「…僕、どうしたんだろう？」

ゴ布林「戻ったな」

ジェリー「…君は誰？」

ゴ布林「俺様はゴ布林だ」

ジェリー「ゴ布林？…ママは！？」

ゴ布林「パパもママも出て行った。お前を捨ててな」

ジェリー「僕を捨てた？嘘だ！」

ゴ布林「本当だよ。人間、最後は自分勝手なものだ。だがな、それを攻めちゃいけない」

ジェリー「じゃあ、どうすればいいの？」

ゴ布林「笑うんだ。ぜーんぶ笑っちゃまえばいい。幸せも不幸せも似たようなものさ。だが覚えておけよ」

ジェリー「何を？」

ゴ布林「最後に勝つのは、笑ってるやつさ」

我に返るジェリー。

スコットランド「ふえーん！なんてかわいそうな話だ（泣）」

ロンドン「グスッ…そういう話ならどんどんやれ（泣）」

シリアス「それで終わりか？」

ジェリー「…え？」

スマイル「それで終わりだ」

スコットランド「ひつく…王子！？」

ロンドン「スマイル王子、どうしてこんなところに！？」

スマイル「法を破っていないか、観客に紛れて確かめに来たのだ。大丈夫、彼らはしかめっ面王国の法を守り、誰一人笑ってなどいない」

シリアス「これはこれは、王子直々にご苦勞様です。王子がおっしゃるのであれば問題ないでしょう。真実を申されているのならばですが」

スマイル「無礼だぞ、シリアス大臣！いくらコールド女王のお墨付きとは

いえ、私を疑うとは何事だ」

シリ阿斯「失礼いたしました、スマイル王子。念には念を入れたかったま
での事、他意はございません。どうかお許しを」

スマイル「…もういい。先に城へ引き上げている」

シリ阿斯「ですが」

スマイル「行け！」

シリ阿斯「…は」

帰っていくシリ阿斯たち。

ジェリー「王子、ありがとうございました」

スマイル「いや、私の方こそ、身分を隠して騙すような事をしてすまなか
った」

フォックス「だけど王子、どうして助けてくれたんですか？」

スマイル「…素晴らしかったからだ」

キャット「舞台が？」

スマイル「ああ…そして笑うことも」

ジェリー「これまで笑ったことは？」

スマイル「あるよ。私が子供の頃は、よく笑った。母であるコールド女王
も共に」

バード「いつから笑えなくなったんですか？」

スマイル「父であるスマイル国王1世が亡くなってからだ」

ジェリー「ご病気か何かで？」

スマイル「いや…父は私を助けるために命を落としたのだ」

ジェリー「何があったのですか？」

スマイル「…大雨が降った年、洪水がこの国を襲った。民衆を助けたくて
船を出したんだが、大波に飲まれて船は沈没。まだ子供だった私は容赦の
ない水の流れに飲みこまれいった。だが違う船からそれを見ていた父は水
に飛び込み私を助けてくれた。しかし力尽きた父は私を船に乗せると…流
され水の中に消えていった…」

ジェリー「そんな事が…」

スマイル「父はよく笑う人だった。最後、水の中に沈む寸前、私を見て笑ったんだ。その笑顔は、頼んだぞ、そう言っていたような気がする」

ドリル「そうおっしゃってましたよ。きっと」

スマイル「その後すぐ、あのシリアス大臣が現れた。復興を名目に城の中樞にまで入り込み、夫を亡くし悲しみにくれる母を操り、今では国政を牛耳っている」

マーガレット「あの男は何者なのかしら？」

フォックス「さあな」

スマイル「笑わなくなった母は、皆が笑う事も許さなくなった。人の幸せを妬むようになり、この国では笑う事は重罪になった」

バード「それもシリアスが？」

スマイル「ああ。国を掌握するにはその方が都合がいいらしい。国民が不幸せの方がね」

アイリッシュ「そこまで分かっている、戦わないのですか？」

ウィーン「アイリッシュ！すみません、王子」

スマイル「…戦う？私が？あのシリアス大臣と？」

ネリー「そうです、王子。あなたはいずれ、この国を引っ張っていくお方。このままでは、あなたもあのシリアス大臣の言いなりです。そうしたら未来永劫この国に笑いが戻ってくることがない。あなたはそれでもいいのですか？お父様、いえ、スマイル前国王はおっしゃったんですよね？この国を頼むと」

ホビー「伯母さん…」

アビー「(ネリーに抱き着く)」

スマイル「……」

ジェリー「よくお考えになってください」

第四幕

城内。

コールド「芝居小屋に潜り込んでいたそうですね？」

スマイル「はい」

コールド「なにか分かりましたか？」

スマイル「はい」

コールド「聞きましょう」

スマイル「笑いは必要です…」

コールド「何といいましたか？」

スマイル「笑いは必要です。笑う事を禁じるなんておかしい。法を無くすべきです。笑いを禁ずる法を！」

コールド「笑ってどうなると言うんです？」

スマイル「女王…」

コールド「笑ってあの人が帰ってくるというのですか？」

スマイル「あの人…」

コールド「国王が亡くなった時、私の心は死んだのです。もう二度と笑うことは出来ない。笑う事は許されないので。スマイル、あなたもです。国王は…あなたのせいで亡くなったのです。誰よりも、あなたが笑う事は許されない。あの方は二度と笑うことが出来ないのですから」

スマイル「…しかし…国民は…国民の笑う権利まで奪うことは」

コールド「幸せなどいりません！」

スマイル「……そんな」

コールド「二度と求めることもしない…それが私の…弔いです（去る）」

スマイル「女王！…コールド女王…」

M s m i l e i s …

シリアス「早いところ片を付けた方がよさそうだな」

ロンドン「分かりました」

シリアス「今夜は暑い夜になりそうだ」

スコットランド「まかせといてください」

ジェリー・ドルフィン一座の芝居小屋。

プリンセスが主演のシンデレラを上演中。

※「Unbelievable Cinderella」信じられないシンデレラ」の垂れ幕

プリンセス（シンデレラ）「お姉さま、靴が磨けました」

マーガレット（長女）「やだ、ここがまだ汚れてるわ。シンデレラ、しっかり磨いてよ！」

プリンセス（シンデレラ）「ごめんなさい、お姉さま！すぐにやり直します！」

キャット（次女）「私の手袋がないわ！シンデレラ、早く持ってきて！」

プリンセス（シンデレラ）「すみません、今すぐ！」

ジェリー（母親）「早くおし、シンデレラ！姉さんたちが舞踏会に遅れたりしたら、お前のせいだよ！」

プリンセス（シンデレラ）「そんな…」

ジェリー（母親）「なんだい、口答えするのかい？生意気に、お仕置きだよ！」

殴り損ねてぐるぐる開店して、柱に激突する母親。

観客「（大笑）」

ジェリー「痛つつつ…あんたって子は！」

そこに王子の家来が来る。

ジェリー（母親）「まあ、これはこれは…お城の方がわざわざ、どうかなさいましたか？」

フォックス（家来）「人を探している」

ジェリー（母親）「人？いったいどんな？」

フォックス（家来）「王子」

チビで不細工なギル（王子）が入ってくる。

※バード（家来2）が靴を持ってついてくる。

キャット（次女）「小っちゃ」

観客「（笑）」

ジェリー（母親）「これ！…王子様、こんな汚い所に…恐れ入ります」

フォックス（家来）「王子はこの靴がぴったりの女性を探しておられる。もし靴が合えば、その女性を妃に迎えたいとのことだ」

ジェリー（母親）「まあ！うちにはちょうど年頃の娘がおります。どうぞお試しください」

バード（家来2）「ではこれを」

マーガレット（長女）「ママ、絶対決めてみせるわ！」

ジェリー（母親）「頑張るのよ！」

観客「（笑）」

マーガレット（長女）「うう…ん…（全然入らない）ムキー！」

フォックス（家来）「やめろ！靴が壊れるだろうが！」

観客「（大笑）」

マーガレット（長女）「ふうふう…」

ジェリー（母親）「惜しかったわねえ…さ、次あなたよ」

キャット（次女）「えー、やだ、王子あんなチビだって知らなかったもの」

観客「（笑）」

ジェリー（母親）「何言ってるの！？チビでも不細工でもいいのよ！ベッドにもぐって目つぶつちやえば皆一緒よ！ほら早く！」

観客「（大笑）」

キャット（次女）「もう…（しぶしぶ履く）」

バード（家来2）「少し大きすぎるようだな」

ジェリー（母親）「そんなことはありませんわ！こうすればぴったりに（次

女の足を踏みつける」

観客「(大笑)」

フォックス(家来)「インチキするな！インチキ！」

観客「(大笑)」

ギル(王子)「そなたは？」

プリンセス(シンデレラ)「え？」

ジェリー(母親)「あ、この子はいいんです！すみませんね、汚いなりで」

ギル(王子)「ババアうるさい」

観客「(大笑)」

ジェリー(母親)「ババアって…」

ギル(王子)「靴を履いてみてはくれないか？」

プリンセス(シンデレラ)「…はい」

バード(家来2)「…おう！ぴったりだ！王子、見つかりました！王子がお探しの方は、この女性です！」

フォックス(家来)「お嬢様、王子の妃になっていただけますか？」

プリンセス(シンデレラ)「いやです」

ギル(王子)「え？なんで？」

プリンセス(シンデレラ)「だってチビは…無理—！！」

観客「(大笑)」

エンディング。

M 「旅一座ジェリー・ドルフィンのテーマ」(FULL)

曲の途中で舞台上にボアが駆け込んできく。

ボア「大変だ！火事だ！みんな逃げろ！」

フォックス「なんだって！」

ざわつく場内。

ウィンディ「しまった！気が付かなかった！みんな泣いて！フー！」
ジェリー「違うんだ、ウィンディ！やめろ！」

風が送られ、轟音を上げて火の手が上がる。

全員「(叫ぶ)」

ウィンディ「わー！ごめんなさい！」

キャット「ジェリー、逃げないと！」

ジェリー「観客が先だ！お客様、落ち着いて！」

ロンドン達が現れる。

ロンドン「これで終わりだな、猿芝居一座ジェリー・ドルフィン」

ボア「お前たち、まさか！？」

スコットランド「その通り。早いところ片を付けるよう言われたんでね。
手っ取り早く、やらせてもらったぜ」

キャット「火をつけるなんて…あんまりよ！」

ロンドン「言っとくが逃げられやしないぞ。テントの外は兵隊たちが囲んでる。お前たちはもちろん、お前らを見に来てる奴らも反逆罪とみなし、
まとめて焼き尽くす。跡形も無くな」

スコットランド「分かったら大人しく待ってろ。遠火の強火で中までしっかり焼けるまでな」

ロンドン・スコットランド「わーははははは！(互いに向かって)笑うな！」

スマイル「やめろ！今すぐ全員を外に出すんだ！」

ロンドン「スマイル王子。やはり来てたんですね」

スマイル「お前たちのした事は女王に報告する！」

ロンドン「知ってますよ、女王も」

スマイル「なんだと?…」

スコットランド「コールド女王はあんたを見放した。だからあんたはもう王子でも何でもない、ただの男だ」

スマイル「まさか…」

ロンドン「せいぜいあの世で笑うんだな」

スコットランド「あばよ」

去る二人。更に燃え広がる火。

ジェリー「嘘ですよ、王子」

スマイル「ジェリー?」

ジェリー「親が子供を見捨てるわけがない…そんなはずがない」

《ジェリーの無意識の幻影》

ジェリー「パパ、もうやめてよ。飲みすぎだよ」

パパ「うるさい!ガキのくせに生意気な口たたくんじやない!あっちへいってろ!(ジェリーを突き飛ばす)」

ジェリー「ごめんなさい!パパ、叩かないで!」

パパ「メアリー!メアリー、いないのか!?」

ママ「どうしたの!?まあ、あなたまたそんなに…」

パパ「酒を持ってこい!」

ママ「ないわ」

パパ「ない?嘘を言うな!」

ママ「嘘なんか言うのですか。もう家にはひとかけらのパンも」

パパ「うるさい!(ママを叩く)」

ママ「あ!(倒れる)」

ジェリー「やめろ!ママを叩くな!(パパにしがみつく)」

パパ「離せ!こいつ…離せ!(ジェリーを突き飛ばす)…」

出て行くパパ。

泣きながら台所に戻るママ。
膝を抱えて泣くジェリー。

パパが帰ってくる。

ジェリー「パパ…」

パパ「ジェリー…すまない」

ジェリー「パパ！」

抱き合う二人。

ジェリー「弱いパパを許してくれ…だけど、パパはお前を愛している。心から愛してる！」

ジェリー「僕もだよ、パパ！」

ママも戻ってくる。

パパ「メアリー…」

ママ「私もあなたを愛してる」

パパ「俺もだ」

抱きしめ合う三人。

パパ「必ず酒をやめる。そうしてもう一度、昔のように三人仲良く暮らそう。約束する」

ジェリー「(泣)」

パパ「パパを信じてくれるかい？」

ジェリー「信じる。僕はパパを信じるよ」

パパ「ありがとう、ジェリー」

我に返るジェリー。

水が降ってくる。

ギル「うわー、今度はいったい何だ！？」

プリンセス「水よ！すごい、雨みたい！」

ドリル「火が消えていくよ！」

バード「助かった：焼き鳥になるとこだった」

フォックス「俺はきつね色になるところだった」

バード「もともとだろ？」

フォックス・バード「(笑)」

キャット「大丈夫？マーガレット」

マーガレット「ええ、キャットも」

ウィンディ「兵隊たちがみんなでテントに水をかけてるよ！」

ボア「本当か！？ありがとうー！」

座員「ありがとうー！」

捕らえたシリアスたちを引立て、女王が入ってくる。

シリアス「まったく、どいつもこいつも旅芝居なんぞに感化されやがって」
女王「シリアス、あなたを大臣から罷免します。今日の罪は一生かかって償いなさい。わが国民を殺そうとした罪を！」

シリアス「ごめんだね。笑いがなんだ？笑顔が何だ？そんなもん、反吐が出ら」

ゴブリンが現れる。

ゴブリン「消えろ、闇」

シリアス「貴様、なぜ俺の正体を」

ゴブリン「闇でしか生きられない奴は、本物の闇に帰りな。真っ暗闇の、闇の中の闇にな（笛を吹く）」

シリアス「クソッ」

ロンドン「嫌だ…やめてくれ…」

スコットランド「助けて…」

ロンドン「やめろー！」

スコットランド「助けてくれー！」

闇の中に消えていくシリアスたち。

女王「スマイル…」

スマイル「…コールド…女王…」

女王「ごめんなさい、スマイル！（スマイルを抱きしめる）ママが悪かったわ」

スマイル「……ママ」

女王「あなたを失いかけて良く分かった。私にとって一番大切なのは、あなたの笑顔だつてことが。許して、スマイル…」

スマイル「……悲しむママに、今まで言えなかったけど…パパは亡くなるその時でも、笑顔だったんだ。すごいだろ？僕のパパ」

女王「ええ、すごいわね。すごい男よね、私の愛した人は」

スマイル「（うなずき）ジェリー、紹介するよ。僕のママだ」

ジェリー「お初にお目にかかります。コールド女王」

女王「色々嫌な思いをさせてしまい、すまなかったわ」

ジェリー「大丈夫です。全てを笑い飛ばすのが喜劇役者ですから」

女王「これからは大いに笑わせて」

ジェリー「それでは、芝居を続けても？」

女王「もちろんよ」

アビー「やった！！」

ネリー「良かったわね、アビー！」

ウィーン「これからは好きな時に笑えるのよ！」

ホビー「よかった！僕本当は笑うの大好きなんだ！」

アイリッシュ「女王、ばんざーい！」

全員「ばんざーい！ばんざーい！」

コールド「やめて。私は今日で女王の座を降ります。今日からこの国の国王は、ここにいるスマイル国王2世です！」

全員「（歓声と拍手）」

ジェリー「祝祭だ！歌おう！踊ろう！」

M 「S m i l e & T e a r s」

ゴスペルV e r .

エピローグ

焚火の日を囲み、野宿をするジェリー・ドルフィン一座。

マーガレット「こんなことなら、しかめっ面王国にいた方が良かったんじゃない？」

フォックス「無理だよ、あの人には」

ドリル「根っからの風来坊。一か所に長居できない性分なんだよ」

プリンセス「私は好き。いろんな出会いに、いろんな景色」

ウィンディ「僕は風だろ？一時たりとも同じ瞬間はないから、少しわかるよ。ジェリーの気持ち」

キャット「そういえば、国の名前変えるらしいわよ」

バード「何になるの？」

ボア「スマイル王国だって」

プリンセス「いいじゃない、スマイル王国」

ギル「そうかな？にやけっぱなし王国とか、はらいてえはらいてえもうやめて王国とか、もっと面白い方が良かったな」

ドリル「国の名前が面白くてどうするのさ」

フォックス「いいじゃん、その方が争いも減るかも」

ウインディ「争いが減るのはいいね。減るといいな、争い」

キャット「行かなきゃね。笑わせに」

ボア「ああ。行こう、笑いを届けに」

マーガレット「星がきれいね」

ドリル「本当だね」

一人、星を見ているジェリーを見降ろすゴブリン。

ゴブリン「お前を生き返らせたのは、間違いじゃなかったな」

何も言わず微笑むジェリー。

昔のジェリー一家が現れる。

ジェリー「やあ」

子供のジェリー「やあ」

ジェリー「幸せそうだね」

子供のジェリー「うん。幸せさ」

ジェリー「良かった」

子供のジェリー「君は？」

ジェリー「最高に幸せさ」

子供のジェリー「良かった」

ジェリー「ああ」

M 「笑ワンダフルワールド」

おしまい

M 「旅一座ジェリー・ドルフィンのテーマ」(FULL)